

【スペシャルインタビュー】「遠隔医療で医療アクセスの格差解消に挑む」

月原 尚哉 （ウィーメックス株式会社 病院ソリューション部 事業企画課 課長）

少子高齢化が加速し、労働者不足が大きな問題となっています。今まで住民の生活を支えてきた路線バスなどの公共交通機関も運転手不足により減便や廃線を余儀なくされています。医療でも医療従事者が不足し、確保が難しくなっていることに加え、医師の偏在も大きな問題となっています。地域によってはすでに医療アクセスの格差が生じてきています。

今回は、PHCホールディングス株式会社傘下のウィーメックス株式会社 病院ソリューション部の月原さんに遠隔医療事業の取り組みや今後の展望についてお話を伺いました。



月原 尚哉

トヨタ自動車 グローバル営業企画(含海外駐在)
ソフトバンクロボティクス(ロボティクス) グローバル事業開発/営業企画
アクセンチュア(コンサルティング) 人事系プロジェクトに従事(含客先常駐)
ウィーメックス(ヘルスケア) 事業企画・推進

森	はじめにウィーメックス株式会社(以下、ウィーメックス)の事業と遠隔医療の事業に取り組まれることになった経緯を簡単にご紹介ください。
月原	2021年12月から、当時のPHC株式会社内で少子高齢化や医師の地域偏在などの課題に対し、医療アクセスの格差を解消することをミッションとして遠隔医療事業は立ち上がりました。2023年4月に主力製品の診療所向けの電子カルテやレセプトコンピュータ事業や、保険薬局向けの薬歴事業とともに、ウィーメックスとして事業を継続しています。ウィーメックスとなった後も、遠隔医療は、医師の働き方改革や、診療報酬改定の影響もあり、ニーズが高く、社会へ大きく貢献できる事業と考えています。医療従事者の負担を軽減しつつ、地域の皆様が住み慣れた地域で安定した医療が受けられるよう、引き続き現場の皆様のお声を聞きながら、ソリューションを提供してまいります。
森	遠隔医療事業の具体的な製品について教えてください。
月原	米国のTeladoc Health, Inc.(テラドックヘルス社)の製品を日本市場に導入し、展開しています。ソフトとハードが一体となった遠隔医療ソリューションで、専門医が不足する医療機関と遠隔地の専門医をつなぐシステムです。専門医は自身の端末にアプリを入れるだけで利用可能で、患者さん側にはカート型や小型のデバイスを設置します。遠隔医師がカメラを操作できる機能や、最大70倍のズーム、医療機器との接続など、医療現場に特化した機能が特徴です。また、通信の暗号化や3省2ガイドラインにも準拠し、セキュリティも対策されています。

森	リアルタイム遠隔医療システム「Teladoc HEALTH」の導入実績について教えていただくことは可能でしょうか？
月原	具体的な導入数は非開示ですが、日本での発売開始から3年間で、29の都道府県への導入が進んでいます。新生児医療や地域医療などの『ドクターtoドクター(D to D)』、看護師が診療を支援する『ドクターto患者 with ナース(D to P with Nurse)』など、様々な領域で活用されています。
森	病病連携・病診連携などにおいて「Teladoc HEALTH」の活用は大変有効かと思いき、特定看護師や診療看護師も増えてきている中でD to P with Nにおける活用余地も今後ますます大きくなる可能性を感じます。さらなる普及に向けた営業体制や販路拡大の工夫はありますか？
月原	当社の強みである診療所向けの電子カルテ・レセコンの販路を活かしながら、電子カルテ・レセコン部隊や現地のディーラーと連携し、役割分担を行い、医療機関への紹介を進めています。
森	ベースとなるレセコンや電子カルテにおける導入実績や豊富な開発経験が生かされているんですね。デジタル庁の「標準型電子カルテ開発ワーキンググループ」にも参画されているのも頷けます。オンライン診療を含めた医療法の改正も待たれるところですが、遠隔医療の普及に向けた法的な規制緩和についてはどのように捉えていますか？
月原	オンライン診療の受診施設制度など、規制緩和の動きは遠隔医療にとって追い風と考えています。政府の施策にあわせて、より多くの患者さんに医療を届けられる体制を整えていきたいと思っています。
森	モビリティとの相性が非常に良いのではと感じますが、実際の取り組みについてはいかがでしょうか？
月原	車両メーカーと連携し、「Teladoc HEALTH」を搭載した医療 MaaS やドクターカーの取り組みがあります。山間部など巡回診療のような形で回ったり、公民館などに車をつけて一斉診療するような医療 MaaS の形で展開しています。プレスリリースもいたしました。東京都立病院機構東京都立小児総合医療センター様と連携し、小児用新型ドクターカーに「Teladoc HEALTH」を搭載して容体が急変しやすい小児の緊急度の高い場面などでも活用されています。
森	今後の遠隔医療事業の成長戦略についてお聞かせください。
月原	2つの方向性があると考えています。 1つは、遠隔医療の運用ガイドラインや病院間連携のルール整備です。「Teladoc HEALTH」の性能をフルに活かせるような様々なユースケースを積み上げ、ユーザーである医師が導入による効果の予測を立てやすいものにするとともに、複数のユーザーが関わるからこそ、ユーザーの皆様と一緒にルールや運用の枠組みをつくっていくことで、現場に寄り添った形で医療機関での導入を進めていきたいと考えています。 もう1つは、単に診察というプロセスに留まらず、診療予約から患者さんのご自宅でのケアまで、ウィーメックスのレガシーを活かした一気通貫のソリューション提案の実現を目指しつつ、遠隔医療の普及も加速させたいと考えています。
森	少子高齢化社会が進めば、遠隔医療が担う役割もより大きくなっていくと思います。本日は貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました。

今回は、ウィーメックスの月原さんに遠隔医療事業の背景や今後の展望について詳しく伺いました。少子高齢化が進み、遠隔医療への期待が大きくなる一方、課題解決提案につながるユースケースの積み重ねやルールの整備と対応が求められます。ウィーメックスの取り組みに今後も注目していきたいと思っています。

(聞き手)

森ヘルスケア・サポート株式会社

森 清司